九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アベラール/エロイーズ往復書簡集の真正性をめぐる諸問題

岡崎, 敦
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 助教授 : 西洋史

https://doi.org/10.15017/3699

出版情報：史淵. 141, pp.83-125, 2004-03-10. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

アベラール/エロイーズ往復書簡集の真正性をめぐる諸問題

岡崎　敦

はじめに

1997年に出版されたクランチーの新著は[CLANCHY 1997][(1)]、最近のアベラール研究の刷新を強く印象づけるものであったが、これと呼応するように、ここ30年の間、彼とエロイーズとの間の往復書簡集をめぐってかわされたきた議論もまた、従来の研究の構図に大きく変容をせまるものである。ここでの目標は、主として70年代以降の研究史を紹介し、研究の現状を総括することであるが、とりわけ以下の諸点を念頭においた整理を行いたい。

まず第一に、本稿では、すでに膨大な数に上っている諸研究について、個々の論点の妥当性を吟味するよりもむしろ、研究の関心・方法の変容を総括することに力点を置く。近年の研究状況が提示する最大の問題は、研究のあり方それ自体について提起されていると考えられるからである。第二に、議論のかなめとして現れる、往復書簡集のいわゆる真正性問題を、近年歴史学において盛んに議論されている「史料論」の観点から[岡崎　2003]とらえ直してみたい。最後に、往復書簡集をめぐる基本的な史料情報についても、ある程度整理紹介するが、これは日本における今後の研究に対して、共通の土台を提供するためである。

以下、ほぼ研究の歴史を年代順にたどりながら、節目の段階ごとに問題点を整理していくことにする。

本論に入る前提として、60年代までの往復書簡集をめぐる議論を簡単に整理

しておきたい［MONFRIN　1975］［MARENBON　2000］。

17世紀始めにはじめて活字本として流布した書簡集は、19世紀以降、その作成に関してさまざまな疑義を受けるに至った。そこでは、主としてテクストの証言間の矛盾や心理的解釈を根拠に、アベラールの単独執筆説、第三者執筆説が提出されたが、とりわけ1913年以降複数の論文によってアベラール単独執筆説を強固に主張したシュマイドラーにおいては、テクスト証言の相互関係に加えて、アベラールの文体、さらには「虚構の書簡」編纂の中世的伝統など、のちにも繰り返される論点が提示されていた[SCHMEIDLER　1914：1935；1940]。しかしながら、20世紀の中世哲学史研究における最高の権威の一人であったジルソンが、エロイーズ書簡の真正性を擁護したことで[GILSON　1937/64]、種々議論がありながらも、60年代いっぱいまで、書簡集問題は基本的に沈静化していたのである。

1　写本研究と「回心物語」説

1970年代はじめ、書簡集の性格についての或る同一の仮説が、さまざまな方面から一斉に提出されたが、これは、一方でそれまでの個別研究を総括するものであると同時に、他方では従来の研究姿勢に対する強い批判を含んでいた。

すべての議論の前提となったのは、すでに50年代に公表されていたモンフランによる書簡集写本の検討である［MONFRIN　1959］。ここではやや詳しく、その内容を紹介しておきたい（付録資料参照）。

通常「アベラール/エロイーズ往復書簡」と呼ばれているのは、以下の書簡である。すなわち、「我が災厄の記」と通称される第１書簡、「愛の書簡」と通称される第２から第５書簡、「修道書簡」と呼ばれる第６および第７書簡、最後に、アベラールがエロイーズの求めに応じてまとめた「戒律」を含む第８書簡である。書簡集をはじめて活字版で刊行した1616年のデュシェーヌの刊本においては(2)、さらにエロイーズの「命題集」、アベラールの「賛美歌」、「説教集」、最後に「信仰告白」が付加されていたが、現在までに確認されている中世の「書簡

集」写本は、一つをのぞいて、これらをまったく含んでいない。

書簡集を含む写本は、以下の十種しか伝来しない。*J* は、著名なジャン・ド・マンによるフランス語翻訳であり、14世紀中葉の転写と推定されている。もとになったと思われるラテン語版写本は伝来していない。第1から第7書簡、さらには「信仰告白」からなる。*T* は、起源が異なる三つの部分が合冊されたものだが、書簡集部分については、13世紀末から14世紀始めに転写されたものと思われる。第1から第8書簡を含む。*A* は、13世紀末の写本で、ペトラルカが所蔵したのち、ミラノ公を経て、16世紀にフランス王の蔵書となった。第1から第8書簡を含むが、最後の書簡は序文のみで、「戒律」本文は欠けている。*C* は、15世紀の写本で起源は不明である。第1から第8書簡を含む。*E* も15世紀末あるいは16世紀初めの写本で起源が不明である。構成は、*C* と同じである。*F* は、16世紀末から17世紀の写本で、パリのサン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院に由来する。構成は、まず第2から第7書簡が置かれ、そのあとに第1書簡が転写されている。*B* は、13世紀末から14世紀始めの写本で、あるパリ大学教師が所蔵したのち、最終的には王の手にわたった。*A* と同じく、「戒律」本文を欠いたかたちで伝来する。*R* は、13世紀末から14世紀の写本で、15世紀にはランス教会参事会の所蔵となっている。構成は *B* と同じである。*D* も、13世紀末から14世紀の写本で、マルシエンヌ修道院起源と推定されている。第1書簡しか含まれていない。*Y* は、14世紀後半の写本で、15世紀にはカンブレ教会参事会員の手にあった。第1から第5書簡のみを含んでいる。

他方で、1616年刊本の刊行者デュシェーヌは、以下のような貴重な情報を与えてくれる。この事業を最初に手がけたダンボワーズは、三つの写本を参照したと証言しているが、このなかで決定的な重要性を持つのは、彼がパラクレ修道院において、修道院長マリ・ド・ロシュフーコーから借り受けた写本であり、この写本こそ、刊本の底本とされたのである。この写本には、修道院慣習律 Institutiones を始めとする修道院資料が付属していたという。写本自体のその後の情報はなく、現在遺失している。ここで重要なのは、前記 *T* 写本（いわゆるトロワ写本）が、デュシェーヌの刊本とほぼ同一のテクストを提示している

ばかりか、さらには、慣習律を含む修道院資料をもまた含み込んでいるという事実である。

したがって、トロワ写本を、より詳細に吟味せねばならない。現在、この写本は、トロワ市図書館に、手書本802番という分類のもとに所蔵されている。このうち、第1葉から第103葉までが、書簡集を含む一つのまとまりをなす部分を構成しており、短い時期に一気に製作された考えられる。当該内容は以下のとおりである。まず第1葉から第88葉までが、書簡集によって占められている。ついで、89葉から90葉裏まで慣習律が転写され、90葉裏から93葉表まで著名なシャルトル司教イヴの教会法集成 *Panormia* からの抜粋が並ぶ。93葉には同定できない教会会議議決、93葉表から94葉表にかけてはプレモントレ会総会規定（1274-1238年）、さらには94葉から102葉裏に816年アーヘン教会会議議決のそれぞれ抜粋が記載されている。最後に、102葉裏には、アベラールとエロイーズの墓碑銘、および尊者ピエールによるアベラールの罪の赦し宣告が、15あるいは16世紀の筆跡で付加されている。

この写本が、きわめて緊密なプランのもと、細心に編集されていることは明らかであり、内容から女子修道院を念頭に置いていることも想定可能である。

他方で、写本の伝来過程については、以下の事実がわかっている。この写本は、1347年3月21日、当時パリ教会参事会員で、パリ大学教師でもあったロベルト・ディ・バルディが、パリ参事会から購入したものである。彼はイタリア出身で、ペトラルカの友人でもあった人物である。彼は1349年に死去しているが、この時点での写本の運命については不明である。トロワ写本は、前記のように15あるいは16世紀に墓碑銘他を付加されたほか、タイトルを赤く強調するなどの処置が受けたが、1617年フランソワ・ピトゥの遺言のなかにふたたび現れる。彼はこの年、この写本をトロワのオラトリオ会修道院に遺贈することを取り決めたが、彼の死後、遺言は実施されたことが確認される。18世紀にも当該修道院の蔵書として言及があるのが、確認される最後の伝来情報である。その後おそらくは、革命によって市図書館へ移送され、現在に至ったものと思われる。

以上の調査から、モンフランは以下のような結論を導いた。第一に、少なくとも17世紀始めの時点で、内容構成および書簡集のテクストにおいて、ほとんど同一と考えられる写本が二種類存在していた。すなわち、トロワ写本と、デュシェーヌ版の底本となったパラクレ写本である。第二に、トロワ写本は、おそらくパラクレ修道院の分院の一つが所蔵していたものが、何らかの理由で13世紀にパリに流出したものである。最後に、パラクレ写本は、17世紀はじめにダンボワーズが借用したのち、パラクレ修道院本院に返還され、この修道院がその後も保持し続けたが、おそらく革命時に遺失した。

往復書簡集について、その写本伝来状況から引き出しうる論点と研究の展望は、以下のようにまとめられるだろう。

まず第一に、基本的状況の確認である。書簡集の写本として、13世紀末以前のものは伝来していない。また、全体として数が少なく、テクストのヴァリアントも大きくない。写本相互の関係も比較的単純であり、書簡「集」としての単一の原本の存在を想定可能である。そして、原本の出自としてパラクレ女子修道院を考えることは、きわめて自然な推定と言えるであろう。

第二に、16世紀初めにパラクレ修道院本院に所蔵されていた写本に、極めて類似していると考えられるトロワ写本の重要性があらためて喚起される。トロワ写本は、第1から第8書簡（戒律本文を含む）によって構成される書簡集に加えて、おそらくはパラクレ修道院用に編纂された修道生活関係資料を含んでいる。問題なのは、書簡集と修道生活資料が合体している構成が、13世紀末という写本製作年代からどれほど遡るのかという点である。エロイーズの生前にこの形で存在したのか、あるいは後世の編集なのか。

第三に、13世紀末以降写本が突如増えているという事実である。これにはジャン・ド・マンによる翻訳が一定度貢献したことが推測されるが、彼の「反教権・反権威主義」的志向の影響を重視するなら、中世末期のとりわけパリには、ある種の「ロマン主義的文学趣味」による往復書簡享受の存在を考えることもできる。

一見単なる文献学的成果としか見えなかったモンフランの検討結果は、しかしながら、70年代にいたって、書簡集の性格に関する新しい仮説のもっとも強固な論拠の一つとして活用されることになった。いわゆる往復書簡集の「回心物語」説である。「回心物語」説は直接には、モンフラン[MONFRIN 1975]、フォン・ムース [VON MOOS 1975] やロバートソン [ROBERTSON 1972] 等によって明確に提示されたが、この仮説が提出されるに先立ってすでに受容されていたかのようにすら見えるのは [SOUTHERN 1970]、同時期西欧中世史研究において提出されていたさまざまな議論と整合するところが大きかったこともある。ここでは、個々の論点についてさまざまな論者から提出されている議論を詳細に報告するのではなく、全体としてこの仮説がどのように編成されているかを、再構成してみよう。

議論の大前提として、前述の写本研究の成果から、往復書簡集が、その原初的な形態において、以下のような構成からなっていたらしいことを確認しておかねばならない。すなわち、アベラールとエロイーズの生涯を語る第1書簡、ついで彼らの激情を語る「愛の書簡」、そして最後に二人の修道生活を語る「修道書簡」および「戒律」である。さらに、13世紀末に世に出る以前は、書簡集は、女子修道院の修道慣習律等とセットになった形でしか存在しなかった、という事実も念頭におく必要がある。

以上を念頭において、議論の様子を見ると、これは大きく、書簡集の性格と、その編纂の状況の二つに分けられるであろう。

第一に、書簡集問題である。20世紀後半の実証史学最大の議論の一つが、いわゆる史料論的問題関心であるが、ここでは、個々の史料は、それ自体歴史的性格を帯びる史料類型の外では存在しえない、という議論が重要である(3)。ところで、12世紀西欧において「往復書簡集」は、史料類型としては、どのような性格を有していたのであろうか [CONSTABLE 1976；1988]。まずはじめに想起せねばならないのは、およそ他者によって転写・伝来され公開される書簡集とは、なによりまず、修辞学の教科書またはモデル、あるいは宗教的教化のため

の説教なのであって、当初の素材は編纂の過程で大きく手が加えられることが常態であった、という中世史研究の常識がある。中世の書簡集に、名前が割り当てられている「著者」の内面を探るなどは、議論の前提として誤っているのである(4)。その上で、12世紀の西欧については特殊な問題が提起されうる。古典古代およびキリスト教伝統においては、書簡あるいは書簡集の形態で著作が提示される伝統が定着していたが、とりわけルネサンスとも称される12世紀においては、古代末期のキリスト教的古典古代文化伝統が知識人たちの間で大流行を見せた。アベラール/エロイーズの往復書簡集もまた、12世紀に存在した他の書簡集との関わりのなかで位置づけなければならない。

第二に、厳密にはエロイーズではなく逸名の人物に宛てて書かれている、第一書簡問題である。この書簡が「慰め」のトポスのもとに置かれていることは明白であるが、ここで重要なのは、その事実上の自伝として性格である。自らの不幸を語ることから「我が災厄の記」とも呼ばれるこのテクストは、同時代文脈ではどのような位置づけを得るのであろうか。まずはじめに、自伝という形式は、キリスト教文学伝統においてはすでに長い歴史を持っており、ここでも、古代末期のキリスト教的古代文化が復活・流行していた12世紀の文化状況が想起されねばならない。しかしながら、より重要なのは、その内容である。アベラールの自伝は、さまざまな「迫害」を受けながらそれを最終的には神の試練として受け入れる、あるいは前半生の罪の生活を後半生では回心する、というプロットによって構築されているが、前者はいわゆる「キリストの模倣」、後者は「聖人伝」に典型的なプロットである［FRANK 1970］。他方、従来「著名だが得体のしれない哲学者」、あるいは「少女と恋をした知識人」以外の関心を呼んでいなかったアベラールに関して、彼の行動を同時代の宗教的文脈に位置づけようとする研究が現れ始めていたのが70年代であった［MIETHKE 1973］。

第三に、書簡集全体の構造が示す、この史料の存在の意味である。書簡集が全体として、罪の生活から修道生活への回心をテーマとしており、これがキリスト教的聖人伝の典型であるからには、この書簡集の核心部分は、ロマン主義

者が好んで取り上げた「愛の書簡」にではなく、多くの現代刊本が省略する「戒律」へと向かう「修道書簡」にあることは疑問の余地がない。修道院の創建者二人の自伝と、その聖人伝的回心の歴史が語られるという構成から、ただちに推測可能なのは、この書簡集は、修道院の創建縁起、あるいは創建者の「疑似聖人伝」として編集されているのではないかというということである。問題はこれで終わらない。ここでの主題は、単なる聖人伝的語りではなく、一組の男女の話であるからである。男性と神への愛によって救いへと誘われる女性、というイメージは、イエス以来キリスト教伝統に深く根差しているが、とりわけ書簡集に頻繁に登場するヒエロニムスが女子修道制との関わりで決定的な重要性を持つことは、想起する価値がある。この意味では、書簡集の前半はアベラールの、後半はエロイーズの回心がそれぞれ叙述されているといえる。いずれにせよ、往復書簡集は、12世紀西欧という文脈では、著しく濃い宗教的色彩のもとに現れるのである。

最後の問題は、このような書簡集の編纂状況についてである。書簡集の原初形態を示すと思われるトロワ写本には、書簡集に続いて女子修道院の修道生活資料が転写されていることから、この写本は、修道院の修道生活のための基本資料として認識されていたことが想定される。そして、あらゆる論者が認める通り、そこで念頭に置かれた修道院とは、パラクレ以外ではありえない。パラクレにおいてこそ、創建者二人を記念する聖人伝的創建縁起を中心として（書簡集)、それに付属させるように修道生活規律資料(アベラールの戒律と、のちの補完資料）をまとめることが意味をもったに違いないのである。問題は、このパラクレ修道院基幹資料の編纂主体とその年代であるが、この点については、決定的な証拠が存在しない。しかしながら、フォン・ムースをはじめとしてエロイーズの編纂を示唆する論者が多いのは、同時代の証言が一致して、エロイーズの修道院長としての有能さを証言している事実にある。このことは、パラクレ修道院が、創建からほどなくしてすでに、多くの寄進を受入れ、複数の分院を組織するなどの発展をとげていることからも裏付けられる。そして、彼女のこの点での成功が、アベラールの「組織の責任者」としての度重なる失敗・挫

折と、あまりにも対照的なのである。

以上のようにまとめられる、往復書簡集の「回心物語」説については、以下の点を指摘しておきたい。

まず第一に確認せねばならないのは、議論の構図である。論者の多くは、複数の同時代証言の存在から、12世紀初頭にこれらの名前をもつ二人の男女がかつて存在し、大筋で現在知られるような生涯をたどったであろうことは疑っていない。また、ロバートソンのような例外を除けば[ROBERTSON 1972]、相当数の論者は、書簡集編纂にあたってその材料となった書簡が、真正なものとして現実に存在したことも想定しているようである。ここで主張されているのはただ、現在伝来する書簡集は、おそらくは真正な素材を用いながらも、テクストの改竄を受けつつ、後世特定の目的のために編纂・転写された作品、ということのみである。かつて真面目にたたかわれたようなかたちでの真正性をめぐる議論は（「誰それの書簡は本人が書いたのか、あるいは他人が書いたのか」）、そもそも西欧中世に関しては適用することができないとして、正面切った問題とはされない。

第二に、一連の論者の多くが、これ以前の研究の「情緒的」、「心理分析的」性格を強く批判し、「同時代文脈」での理解を標榜しているという点が強調されねばならない。写本研究や、書簡集の史料論、12世紀という歴史的文脈における位置づけなどが、「回心物語」説の議論のかなめを構成しているが、これらはごく普通の歴史学的手続きである。批判の方向は、当然のこととして、アベラール/エロイーズ研究が従来、なぜ十分な学問的水準において行われてこなかったのか、という問題に発展する。実は、20世紀後半という時代は、アベラール研究自体においても、決定的な発展が見られた時代であり、その本質部分は、往復書簡を含む著作の刊行のやり直しや、その前提となる活動の網羅的な再調査といった、純粋に「実証主義」的な文献学的成果によるところが大きい。アベラール著作のテクスト確定や年代推定などの基礎的作業に加えて、関係写本が極度に少なく、かつフランス以外に散在することが多いこと、おそらくは教育

のための資料としていくつものヴァージョンを持つことなど、著作やそのテクストの生成それ自体に関わる重要な諸問題も多く提起されている(5)。

「回心物語」説は、中世史研究全般の動向を背後とする、堅固に構成された議論構成から、書簡集をめぐる議論に決着をもたらすかのように見えた。ところが、ほぼ同時期に、まったく思いもかけぬところから、真正性問題が再提起された結果、議論は終息を迎えるどころか、かえって予想もできない活況を呈することになったのである。

2　ベントン・ショック

1972年クリュニにおいて、12世紀前半を代表する二人のピエール（アベラールとクリュニ修道院長）を対象とする研究集会が開催された[1975]。ここでは、「回心物語」が、モンフランやフォン・ムースらによって明確に提示されることになっていたのだが、一人のアメリカ人研究者の報告が、平穏な雰囲気を打ち破ることとなった。いわゆるベントン・ショックである。

ベントンは、「アベラール/エロイーズ往復書簡集における偽作、虚構および借用」と題する報告において、まず関連のあらゆる面での研究の不足を指摘し、書簡集については従来あまりにも情緒的解釈がまかり通っていたことを批判したのち、当該書簡集について、かつて誰も手を付けたことがなかった方法による、誰もが想像だにしなかった仮説を提示したのである[BENTON　1975-1]。

彼のこの段階での議論は、クリュニ集会を含めて全部で四つの論文によって提示されているが[BENTON　1974；1975-1,2；BENTON/PROSPERETTI ERCOLI 1975]、ここではまとめて整理することにしたい。

ベントンによると、現在トロワ写本のなかに伝来する書簡集は、13世紀末にパラクレ修道院内部の紛争を契機としてあらたに編集されたものである。さらに、その材料とされた要素についても、現在失われたものを含むアベラール著作をのぞけば、12世紀後半のパリで成立した部分（第一書簡がこれにあたる）、および13世紀にパラクレで成立した部分は、ともにまったくの虚構であるとす

る。順に議論を紹介しよう。

まず第一に、書簡集の編纂についてである。ところでベントンも、この書簡集がパラクレ修道院創建者の「回心」を語っており、写本が全体として、この女子修道院の修道生活規律資料であることを承認する。しかしながら、この一件書類には、無視しがたい内容上の首尾一貫性の欠如があるという。たとえば、書簡集の最後をかざるアベラールの戒律と、その直後に続く修道院慣習律については、外見的には後者が前者を補完する役割を果たしているように見えるが、この両者の間には修道生活の原則についての深い乖離が見いだされる。具体的には、女子修道院長の位置づけと、肉食の摂取に関する禁欲の程度が議論される。他方、トロワ写本に含まれる修道生活関連資料は、極めて雑多な性格を持つ資料が並んでおり、内容においても同時に遵守することが不可能な命令を含んでいる。ベントンによると、この写本が含んでいる資料は、パラクレで実際に遵守されていた修道生活慣習を示すものではなく、ある特定時点で特定の目的のために編集されたものである。その謎を解く鍵は、1289年9月30日付けの教皇文書が言及する、院長選挙をめぐる修道院内部の内紛であり、このとき、当事者の一方の資格を難じるために、アベラール戒律の関係個所を偽作することが、この一件書類編纂の目的であったと示唆するのである。

第二に、13世紀末の段階で、書簡集をあらたに編纂するために利用された材料の問題が議論される。まず、第1書簡は、アベラールのことをよく知らない人間によって、おそらくは12世紀後半のパリにおいて作成されたまったくの偽作であるという。ベントンがここで行う作業は、従来から繰り返されてきた方法、すなわちテクストが言及する細かい事実関係の信憑性の吟味である。この中には、エゼキエル書への注釈が他では確認されないこと、アベラールの二人の敵の同定など、おなじみの議論も多く含まれるが、エロイーズのアルジャントゥイユ追放の事実の否定や、アベラールの聖ディオニシウスに対する評価の揺れなどの新しい主張も行われている。他方、書簡集の編纂にあたっては、パラクレ修道院に保管されていた多様な資料が利用されたに違いないが、その中には現存するアベラールの説教、神学著作のほかに、今は失われた彼の修道制

関係著作があり、これらが「修道書簡」の偽作に用いられたとする。

以上から、これらの資料の成立・編纂過程が再現される。まず12世紀後半に、おそらくはパリで第一書簡が偽作され、さらに13世紀にかけて「愛の書簡」が生まれた。このパリ版書簡集は、13世紀末には、パラクレ由来の「修道書簡」部分を一部包含するかたちで、写本の一系列を構成することになる。他方、パラクレの修道慣習律他の部分は確実に13世紀以降の資料が含まれるので(6)、この部分について、エロイーズは関与していないと推測される。したがって、「修道書簡」もまた彼女の生前にパラクレに存在した可能性は低い。往復書簡集は、13世紀末、おそらくは修道院長選挙の紛争における論争資料として、アベラールの戒律を偽作するさいにあらたに編纂された。具体的には、パリで流布していた部分に付加するかたちで、パラクレが所蔵していたアベラールの著作を用いながら、「修道書簡」部分を偽作したのである。

第三に、クリュニ集会から3年後、ベントンは書簡集、とりわけ第1書簡の真正性を科学的に検証するとした論文を、プロスペレッティ・エルコリとの連名で発表した[BENTON/PROSPERETTI ERCOLI 1975]。彼らによると、この問題に関する従来の議論は、主として内容および文体・語彙の吟味を根拠としてなされていたが、後者について、これまで統計的な処理が行われたことがなかった。今回、書簡集およびアベラールの著作におけるいくつかの単語の使用頻度を手作業で計算したとする。具体的には、従来から議論の的となってきた用語を含めて、できるだけ文脈に左右されにくい用語を対象として、とりわけ第1書簡の用語法を、他のアベラール著作（執筆年代およびテクスト類型から、近似のものを選択）、さらには他の著作者の著作のそれと比較検討したのである。その結果は、第1書簡の文体・語彙使用におけるかなり顕著な特異性の確認であり、ベントンらはこれを、autem の過剰に象徴される副詞多様のだれた文体であり、繰り返しが多いことから、アベラールの他の著作と同列に並べることができないと評価するのである。偽作者の同定については、エロイーズではありえないことはもちろん、同時代の著名な著作者との関係も想定できず、不明とするしかないないが、そのあまりにひどい文体は、彼の評判を落とすためか、

あるいは後半生の正しいイメージを称揚するために、あえて前半生を惨めな文体で描いたためではないか、とすら言うのである。

ベントン・ショックについては、若干のコメントが必要であろう。

まず第一に、なにより重要な点は、ベントンの激しい先行研究批判である。とりわけアベラールの文体に関する印象主義的な叙述がやり玉にあげられ、学術的検討の必要が強調される。第二は、彼が実践する方法である。すでにホメロスやシェイクスピアなどに対して課せられていた、文体の統計的検討の当否についてはのちにゆずるとして、ここでは、彼が偽作を推定する手続きとして採用した方法は、実は実証主義歴史学が偽文書の検討において実践していた手続きそのものである点に注意したい。一般に、偽作の推定には、以下の二種類の作業が要求される。一つは、当該作品の性格の確定（ここから作成年代や主体等の推測が可能となる)、いま一つはそのような偽作が行われた歴史的状況の再現である。他方、歴史学においては、議論の信頼性は、いかに多くの異なる要素を首尾一貫したかたちで説明するかにかかっているため、特定作品の成立についても、それをより広い政治的・社会的文脈に位置づけることが必須の課題となる。この意味で、ベントンの研究史上最大の貢献は、往復書簡集研究を、アベラールとエロイーズから切り離し、12-13世紀のパリやパラクレ修道院の歴史状況と関連させる編集過程研究として、あらたに取り上げ直した点にあるといえる。ベントンは、はじめて書簡集研究を本格的な歴史学の対象としたのである。

そして、以上を念頭においてこそ、ベントンの議論に接した「回心物語」論者たちの当惑を理解することが可能となる。彼らは、従来の研究の非学術性をするどく批判して、学問的方法論にのっとった議論を模索していたのであって、ベントンの方法論や作業にはむしろ共感を寄せたからこそ、彼が導いた思いもかけない意外な結論に戸惑ったのである(7)。

ベントン以後、研究動向はあらたな展開を見せるが、その検討は次節に譲り、それに先立って最後に、ベントンの主張にほとんどただ一人全面的に賛同した

シルヴェストルの議論について、簡単に触れておきたい。

ベルギーの歴史家シルヴェストルは、この問題に関して複数の論文を執筆しているが[SILVESTRE 1977；1981；1985=1988]、ここでは彼の意見が体系的に示されている1985年論文を紹介しよう。彼は、ベントンの主張を承認すると述べたのち、あらためて書簡集に含まれる事実関係の齟齬と解される問題を列挙する。しかしながら、ここで興味深いのは、この種の伝統的な論証の当否ではなく、論文の最後で展開される以下のような主張である。彼はまず、書簡集の真正性を擁護する従来の研究の方法論的問題として、テクスト中に問題が指摘されると、それを「後世の手直し」として解決する傾向を指摘し、これを真正性擁護の「安全弁理論」として批判する。ついで彼は、書簡集全体に通奏低音として流れる主題は、教会と性に関するものであるとし、ここでは「高位の聖職者は結婚は禁じられても、女性と関係することはできる」ことが前提とされているとする。そして、このトーンはグレゴリウス改革のさなかの時期とは調和せず、ジャン・ド・マンに象徴される13世紀後半以降にこそふさわしいという。さらに、このように問題が多く、虚構が明らかな史料に関して、(主としてフランス人男性学者によって) これほどまでに熱烈にその真正性が擁護されてきたのはなぜなのか、という皮肉な問いを提示するのである。彼によれば、二人の愛の物語は、とりわけフランス中世文学史学界においては、学問的に取り扱うことが許されない崇敬の対象と化しているという。

3　ベントン批判と、書簡集真正性の再擁護

ベントン・ショック以後、往復書簡集研究はにわかに活況を呈することとなった。重要なのは、議論の構成や方法が、かつてとは別次元で構想されるようになった点である。ここでは、ベントン・ショックへの直接の対応であった、書簡集の真正性擁護に関する動向を整理する。

まず第一は、往復書簡集の文体・語彙研究である。ベントン自身が自らの作業を不十分として、今後のより徹底的な検討の必要性を力説していたこの領域に関しては、ドゥロンクとジャンソンが、書簡集の文体研究を試みた。ドゥロ

ンクは、1979年にアベラール生誕900年を記念してトリアーで開催された研究集会における報告において、エロイーズの文体の特性を検討する［DRONKE 1980］。とりわけ、唯一の写本でしか伝来しない、いわゆる「命題集」*Problemata* とエロイーズ書簡の比較が行われた。その結論は以下のとおりである。まず第一に、二人の往復書簡のみならず、9-13世紀の西欧の書簡においては、cursus とよばれる韻律の規則が適用されており、具体的には velox、tardus、planus という三種の cursus の使い分けこそが、特定作品を特徴づけることになる。ところで、planus、ついで velos の優位が確認されるなかにあって、エロイーズの書簡においては、tardus の優位と planus の相対的低位が認められる。彼女と唯一比較可能なのは、12世紀初めに北フランスで流布し始めていた学生のための手紙書式集であり、この修辞学上の動きは、同時期のパリでも知られていたとするなら、エロイーズは、当時斬新と感じられたに違いない curus を採用していることになる。他方、エロイーズ書簡の修辞学上の特徴としては、これが公開を前提として編纂されていることをあらためて確認した上で、たとえば第二書簡は、全体として修辞学の規則にのっとり、諸権威の引用がしかるべき位置に配置された、シンメトリーな構造を有していることがわかる。結論として、ドゥロンクは、アベラールのものとは異なるエロイーズ文体の存在を指摘し、これが高度な修辞学の素養、および流行に対する感受性を前提とすることを主張するのである。

他方、ジャンソンは、書簡集全体の韻律研究から、まずこれが12世紀前半の特徴的 cursus を持つとして、13世紀以降の編纂を退ける［JANSON 1985］。さらに、ドゥロンクと同様に、エロイーズの tardus 使用の特徴を確認し、その特異性を承認しながらも、アベラール書簡にも同様の痕跡があるとし、書簡集全体はむしろ同一人物の手になるものではないかとして、最終的な編集の主体としてエロイーズを示唆するのである。

第二には、往復書簡の真正性議論のあり方自体が、あらためて俎上にのせられた。書簡の個々の内容に関する矛盾や齟齬の指摘については、ベントンの議論のなかでもやや古風なものと見えたが、1979年にフランス各地のアベラール

ゆかりの地をめぐって行われた研究集会において[1981]、女性文献学者のブルガンは、まさにこの点について、おおよそ次のように述べる[BOURGAIN 1981]。ベントンは、第1書簡の文体と内容が奇妙であるとするが、同じ研究集会でボチエが明らかにしたように、むしろ第1書簡は12世紀はじめのパリと王権周囲の状況を充実に反映しており、微妙な人物についてはあえて名前を伏せるなどの配慮が行われている。激しい文体についても、サン＝ジルダ修道院における極限的状況を念頭におけば、理解は不可能ではない。アベラール戒律と慣習律の齟齬については、そもそも前者はある種のユートピアとして構想されているのであって、修道生活慣習の現実との関係で議論すべきことではない。戒律に見られるある種の女性蔑視的態度も、古代からの伝統のもとにあるものにすぎない。総じてベントンには、テクストと現実とを対照させてそこに矛盾を発見し、それを後世の偽作と短絡させる傾向がある。長期にわたる編纂の結果として伝来しているテクストに関して、個々の矛盾を「真か偽か」の議論に直結させることは、実際には極めて困難なのである(8)。

同様な方法論的レヴェルの批判は、ジェイガーによってもなされた[JAEGER 1980]。彼によれば、とりわけ第1書簡には多くの混乱が存在するとはいえ、これを説明するためには多様な原因が想定可能である。他方、この書簡は一見極めてアベラール的であり、かつ個別の内容は詳細を極めている。12あるいは13世紀に、これだけの作品を偽作する条件を想像することは難しいのではないか。他方、ベントンは、アベラールの著作を利用しながら、一部の書簡が偽作されたことを主張するが、それなら、偽作者はその努力を細部の材料集めに集中したことになる。ジェイガーによれば、偽作の際、細部に注意を払うのは近代の感性であり、中世には、一見してわかる顕著な特徴とアナクロニズムのみが判断の基準であったという。

最後に、ドゥロンクによるベントン批判を見るが、この批判は1972年ではなく1979年のベントンに向けられていることに注意せねばならない。実は、ベントンは、1979年のトリアー研究集会報告において、みなが唖然とするなかかつての自説を撤回し、かわってアベラール単独執筆説を提出したのである

[BENTON 1980]。その検討はのちにゆずるとして、このためにベントンがあらたに提出したのが、第6書簡におけるアウグスティヌスの引用であった。実は、エロイーズがアベラールに修道女のための戒律を要求する第6書簡においては、『結婚の善について』からのかなり長い引用が行われているのだが、この個所とまったく同じ引用文が『然りか否か』にも存在する。ベントンによれば、これは、第6書簡の作者が『然りか否か』、あるいはアベラールが所持していたにちがいない「諸権威引用ノート」を筆写したからに違いない。作者についての最終的な結論を提示することは不可能だが、書簡の作者として、エロイーズよりもむしろアベラールを想定することが自然である。実は、のちに触れるように、エロイーズはパラクレ修道院の慣習律および典礼に関して、アベラールの教えではなく、彼のライバルであった聖ベルナールが属するシトー会のそれを採用していたことが、最近になって確認されている。このような状況を前にして、パラクレに対する自らの影響力を確保するために、アベラールには、戒律執筆がエロイーズの要求に応えて行われたことを示す必要があったというのである。

これに対してドゥロンクは、ベントンの推測を、混乱した議論として一蹴する[DRONKE 1984]。アベラールとエロイーズの著作に共通部分が多く存在することは周知の事実であり、これは二人が同じ、あるいは同一の系列に属する写本を利用していたことを示すだけである。アベラールの引用ノートについてはまったくの空想だが、よりありそうなのは、彼らは、利用していたテクスト写本において、共通の欄外注や記号を付していたため、同一の引用を行うことが可能であったと想定することである。そもそもベントンの議論にはいくつもの問題が潜んでいる。引用の文脈をまったく無視して議論するなどの問題のほかにも、たとえば戒律を含む第8書簡においては、直接の対応関係にある第6書簡から、ほぼ同じ引用が繰り返されており、むしろ前者に関して後世の改竄の可能性が想定されるなど、微妙な問題が存在する。第6書簡については、逆にその真正性を疑う根拠はいっさいない。最後に、ベントンには、エロイーズを議論の背後に押しやる傾向が存在する。同一の引用についても、当該個所の重

要性はまずエロイーズが認識し、その影響がアベラールへとおよんだと考えてもまったく不自然ではないのである。

最後に、ベントンの議論は、アベラールとエロイーズの存在を、より広い時代的文脈に位置づけることの重要性をあらためて喚起したといえる。まず第一に、1979年のトリアー集会において、ラスカムは、ベントン以後の研究状況を概観しながら、以下のように述べる[LUSCOMBE 1980]。まず12世紀の女性史をめぐる近年の研究動向を背景として、女子修道制問題、修道生活における男女修道士の関係、文化活動に積極的に関与する女性像などを取り上げ、書簡集が提示する二人の修道士像は、1130年代の宗教・文化状況にきわめて適合的であるとする。また、書簡集の史料論的考察から、一方では、この史料が個人の人格や事実関係を忠実に復元するものではないことを強調しながらも、他方では、これを純粋な修道院内文献とすることには留保を付し、アベラールの「騎士的性格」とデュビーの若者論とを関連づけるなどして、この書簡集はより広い層に受容されていたのではないかとする。

他方、現存する書簡集が提示する二人の愛人物語は、同時代およびそれに続く数世紀間、どのように見られていたのか、という問題に本格的に取り組んだのがドゥロンクであった[DRONKE 1976]。彼の検討結果は、以下のとおりである。アベラールの息子のための助言詩に「エロイーズの沈黙」についての示唆があるほか、1142年頃にアベラール・シンパによって書かれた *Memorphosis*、1130年頃の詩、さらには彼らの墓碑銘や尊者ピエールの書簡などから、同時代にすでに、書簡集が提示する像と矛盾しない彼らのイメージが流布していたことがわかる。さらに、1974年に発見された、若い女性とその男性教師との間の愛の書簡集写本が [KONSGEN 1974] [MEWS 1999]、その紹介たちが主張するように、我らが主人公たちの初期書簡を提示するものであるかどうかについてはさておき、とにかく12世紀の原本の筆写であることが確実であるなら、このような物語が当時実際にあったか、あるいはありうると、同時代人によって認識されていたことは確実である。他方、1227年以前のある年代記が、エロイー

ズの「遺言」と彼女の埋葬の際の奇跡を伝えているほか、同時期エロイーズのアベラール挽歌なるものも成立しており、13世紀にはすでにロマンティック伝説が誕生していた。その後中世末期にかけて、彼らを主人公とする虚構文学が生産され続けていた。すなわち、同時代およびそれに続く世代の者たちは、二人の物語を驚きと共感をもって見ていたのであって、書簡集の内容には、アナクロニックな要素は基本的にないのである。編纂過程やその主体について問題が残るとしても、この物語の歴史的真正性は疑う余地がないというのが、彼の結論である。

しかしながら、まったく新しい知見という意味では、ボチエの政治史研究、およびワッデルのパラクレ典礼研究が研究史に画したインパクトこそ、真に決定的であったと言わねばならない。

1979年にフランス各地で開かれた生誕記念研究集会において、現代シャルティストの象徴ともいうべきこの碩学は、「アベラールの時代のパリ」というやや漠然としたタイトルのもと、史上初めて歴史学の立場からアベラール問題に取り組む、という歴史的な報告を行った［BAUTIER 1981］。彼は、この報告の後半部分で、主として第1書簡の内容を、11世紀末から12世紀前半のパリの教会世界、およびフランス王権をめぐる政治状況と関連させて読み解いたのである。本稿の趣旨に照らしてボチエの議論を整理すれば、以下のとおりである。すべてを整合的に解釈する鍵は、当時のフランス王権周囲、およびパリ司教座教会内部で闘われていた派閥闘争であり、それは具体的には、「教会改革派」と「テクノクラート派（この表現はボチエではなく、岡崎による）」との対立として現れる。アベラールは、パリに出てきたときに、おそらくは偶然に、「教会改革派」の重要人物であったギョーム・ド・シャンポーと対立関係にはいったことから、「テクノクラート派」の庇護のもとに入り、結果的に「教会改革派」の攻撃の対象となった［岡崎 1996；2001］。たとえば、自伝は、アベラールがパリに赴いた当初、一見すると大きな意味なくパリと故郷を往復したこと、また彼のパリ周辺での活動が攻勢と撤退の間を揺れ動いたことなどを証言しているが、復元されたアベラールの活動年代に照らし合わせるなら、彼のパリでの活動の

成否は、「テクノクラート派」の運命に正確に対応していることがわかる。また、彼がなぜサント＝ジュヌヴィエーヴ教会に学校の根拠を置いたのかという謎も、この教会こそ、「テクノクラート派」の首領で、アベラールのパトロンと目されるエチエンヌ・ド・ガルランドの、パリでの牙城であったことを考えにいれねば、解決され得ないのである。逆に、主人公の男女二人が、なぜ聖ベルナールや、サン＝ドニ修道院およびその院長シュジェールによる執拗な攻撃の的となったのかについても、当時の政治状況を念頭におかねば理解できない。

本稿の趣旨との関連で重要なのは、ボチエの研究成果を承認するなら、第1書簡は、アベラール以外の誰によっても作成することは不可能と考えられる点である。第三者にはほとんど無意味と見えかねない些細な行動の記録は、本人以外に書けたはずはなく、また、政治状況の転変を念頭において初めて、従来やや安易に読まれてきた個所が、意味あるほのめかしや、意図的な言い落としとして理解されうるからである。

他方、主としてヨーロッパにおいて賑々しく闘わされていた往復書簡集論争とはほぼ無関係に、この間、あるアメリカ人修道士が、シトー会研究の一貫として、パラクレ修道院の典礼研究を地道に続けていた。みずからシトー会修道士であるワッデルの研究成果は、最終的にはパラクレ修道院典礼および慣習律史料集として、注釈つきで刊行されたが[WADDELL 1985/3；1987；1989]、これらを直接参照することが出来なかったため、ここではワッデルの研究成果を早くから高く評価し積極的に紹介に努めていたラスカムによるかたちで、論点を整理しよう[LUSCOMBE 1980；1988-1；2003]。パラクレにおける修道生活慣習の研究にとって、トロワ写本が最重要の史料である点は、ワッデルにとってもかわらない。ところで、トロワ写本においては、厳密な意味での往復書簡につづいて、アベラールの戒律が続き、最後に雑多な修道生活関連資料が転写されていた。この際、とりわけ問題なのは、戒律のすぐあとに記載されている慣習律である。この慣習律には、母修道院と娘修道院の言及があるが、パラクレの娘修道院は1157年以前にすべて創建を終えている。他方で、この慣習律には1130年代の初期シトーの慣習律の影響が色濃く感じられるが、ラスカムによれば、

事実同時期は、聖ベルナールのパラクレ訪問やアベラールの書簡などが暗示するように、パラクレの「シトー化」傾向が顕著に見られるという。ラスカムはここから、パラクレ修道院は、エロイーズの生前にすでに、アベラールの戒律を奉じながらも、実際にはこれを適用せず、シトーの慣習律によって運営される修道生活を送っていたと推測し、結果として、エロイーズのアベラールに対する自立性を強調しもしたが、ワッデル自身の解釈はより微妙なものであった。ワッデルによると、パラクレの戒律とはあくまでもベネディクト戒律であったのであり、修道生活自体は、現実生活やアベラール戒律、さらにはシトー慣習律からアレンジされた独自な慣習律を適宜案配することで、運営されていた。この三者には一致点と相違点があるが、これらをもって、エロイーズあるいはパラクレの、アベラールからの自立やシトー化を結論づけてはならない。パラクレ典礼においては、墓所や墓標への行列儀礼、三位一体への強い関心、聖ディオニシウスや聖ジルダスに対する特別な記念の設定など、アベラールゆかりの対象への強い執着が見られる。戒律自体については、これはアベラールの修道思想の現れであり、書簡と戒律の間にさえ齟齬が見られる。また、修道院管理については、アベラールがパラクレに実際にどれほど関与できていたのか疑問であり、当初から、象徴的性格を濃くしていた。典礼については、シトー会典礼の強い影響を受けながらも、そこに多くの異質な要素が合体されている。後者は、アベラールの作と同定可能か、あるいは彼の失われた賛歌等と推測される。アベラールの教えは、間接的なかたちでパラクレ修道生活のなかに生かされたのである。

以上のように整理される、ワッデルのパラクレ修道慣習および典礼研究からは、以下の状況が推測可能と思われる。トロワ写本自体の成立は13世紀以降としても、パラクレ修道慣習は、エロイーズの生前、おそらくは1130/40年頃にはすでに13世紀と本質的には変わらぬかたちで成立していた。そのイニシアティヴは明らかにエロイーズその人に求められる。以上の検討からは、往復書簡集編纂に関するエロイーズの貢献の有無あるいは程度については、直接には結論を引き出せない。

この段階での研究状況を、簡単にまとめておこう。

まず第一に、書簡の文体研究であるが、この点については、議論提出の本人であるベントン自身の態度変更の理由をみよう。すでに述べたように、1979年トリアー集会においてベントンは、書簡集所載書簡の後世における偽作の主張を撤回し、かわってアベラール単独執筆説を示唆する新説を発表した[BENTON 1980]。その理由こそ、文体の性格を特定する作業の不十分さの承認であったのである。彼によれば、みずからが行った作業ですら明確な結論を引き出せないことが明らかであることは、従来印象的に語れてきたアベラールの文体なるものは、それ以上に根拠薄弱であったを示すものであるという。また、文体・語彙研究は、直接にテクストの真偽を決定できるものではなく、せいぜい「第三者」の関与の度合いをはかるだけであるとも述べる。ところが、ベントンは、1986年に開催された「中世における偽物作り」研究集会において、三たびこの問題をとりあげ、今回はコンピュータによる処理を行った結果、書簡集全体が一人の手になることが結論付けられたとして、その主体をアベラールに想定した[BENTON 1988]。その根拠は、五つの指標(cursus、語彙頻度、引用、概念、フレージング・パターン）において有意な統計的偏差が見られないことであるという。

この問題については、ドゥロンクが決着をつけたといってよいであろう[DRONKE 1988]。ベントンの作業は、基本的には恣意的に選択された特定の用語の使用頻度を計算することからなるが、およそこの種の作業を有効とするためには、以下のような方法論的問題がクリアされていなければならない。統計的に有意な意味を引き出しうるサンプルあるいは用語数の確定、比較のための他の作品の選択およびそれらの基本的特徴、似ていることと同一であることとの違いについての「文学的条件」、同じく「統計的条件」などが挙げられるが、研究の現段階では、あらゆる意味で研究は熟していない。さらに、アベラールとエロイーズの間に、ある文体上の共通性があることは確実であるとして、その解釈の妥当性を決定する基準がない。同一執筆説をとるのか、影響関係をと

るのか、後者であるなら、その方向はどちらなのかは、結局研究者の恣意に委ねられているのである。

書簡集の文体研究は、事実上破産し、こののち、これに真面目に取り組む研究はほぼ消滅したのである。

第二に、書簡集の史料論的研究が定着した結果、テクスト情報の間の細かい矛盾や齟齬を拾い上げて偽作を主張するタイプの議論が、すっかり影をひそめたことが挙げられよう。西欧中世における書簡集あるいはテクストは、近代とはまったく異なる論理で編纂されていたのであり、その結果として、テクストから読み取りうる性格の情報とは何なのかがあらためて問われることになる。この種の議論は、すでに「回心物語」説が準備していたとはいえ、さらに極端な方向へと展開することになろう。

しかしながら、この段階でのもっとも顕著な動きは、書簡集の成立過程論をめぐっての意見の共有と集約である。ボチエの政治史研究、およびワッデルのパラクレ典礼研究の決定的ともいえる貢献にも支えられて、書簡集テクストの歴史的真正性と、最終的な編纂状況（パラクレにおける編集）は、ほぼ定説として受容されるにいたったといってよいだろう。ところが、このような動きと同時並行的に、従来の枠組みをまったく考慮に入れない一群の往復書簡集研究が遂行され始めていたのである。

4　新しい議論の方向性。真正性問題からの離脱

ラスカムが述べるように、「書簡集は真か偽か」という単純な問題設定（シュマイドラー/ジルソン複合体）を過去のものとするかたちで、議論の性格自体が複雑化したことこそが、最近の研究上の最大のポイントであり［LUSCOMBE 1980］、編纂の時期や、書簡集の成立および伝来の意味についてはもちろん、中世における真正性の意味自体も問題とされるにいたった。

しかしながら、70年代以降、そもそも往復書簡集の真正性に直接関心を寄せることなく当該テクストを取り上げる研究が、異なった方面からいくつも現れていたのである。

そもそも、前述のボチエやワッデルの研究自体、ベントン・ショックはおろか、ジルソンに代表されるそれ以前の情緒的文学研究の流れとはまったく無関係に、政治史や修道院典礼研究の一環として行われていたのであるが、同様の傾向を示しながら、活発な発言を続けているのがミューである。1985年に発表された「パラクレの蔵書」と題する論文では[MEWS 1985]、トロワ写本について、以下のような議論が展開されている。トロワ写本は、モンフラン説とは異なって、17世紀はじめにダンボワーズがパラクレで借用した写本にほかならない。なぜなら、当時修道制改革のただ中にあったパラクレでは、アベラールの著者は禁書とされ、この写本の保管が義務づけられてはいなかったと推測されるからである。事実、18世紀はじめに写本探索のためパラクレを訪れたマルテーヌとデュランは、トロワのオラトリオ会では当該写本に関心を寄せているのに、パラクレでは書簡集にいっさい触れていない。他方、18世紀末にこの修道院に関して、かつてある修道院長が書簡集を売り払ったといううわさが報告されている。トロワ写本は、存在の証拠がまったくない分院の資料ではなく、そもそもパラクレで13世紀末に作成されたものが、その後すぐパリに流出し、その後、14世紀後半のパラクレの破壊と再建の際に修道院に戻り、15世紀末に、修道院における主人公への関心の高まりの結果、現在見るような付加が加えられた。その後17世紀はじめにパラクレから離れ、ほどなくしてトロワのオラトリオ会の手に渡った。

やや思いつきに近い結論の当否は別にして、ここで注目したいのは彼の議論と関心のありようである。ここで検討の対象となったのは、中世末期以降のパラクレ修道院の関係資料（蔵書目録、文書史料、その他雑多な報告記事など）全般であり、関心自体、実在の二人の恋人ではなく、もっぱらパラクレ修道院自体に向けられている。

しかしながら、古典的研究動向からの離脱は、一部ではははるかに進んだかたちで現れている。その典型は、ジェンダー研究からのアプローチであり、研究史への本格的な批判を行ったものとして、ここではニューマンの議論を聞こう[NEWMAN 1992]。

彼女によれば、往復書簡集をめぐっては、二種類の男性中心主義が存在し、女性の声を抑圧しようとするこれらの構造を暴くことが、ここでの問題であるとする。第一に、書簡集をめぐる議論のなかにある、影響はかならず男性から女性へ向かうという発想や、高度な修辞を駆使する文章は女に書けるはずがない固定観念が攻撃される。他方で、書簡集自体のなかにも、女性蔑視構造が潜んでいる。「回心物語」説を受け入れるならば、そこではもっぱらアベラールの生涯と思想、およびその変容に関心が集中しており、エロイーズはいわばその道具として客体的な取り扱いを受けるのみである。現在まで行われた諸研究を総合すれば、書簡集がエロイーズのもとで成立したことはまず異論の余地がない。往復書簡集とは、エロイーズのアベラールに対する自己犠牲（まずは欲望の、ついでは愛のために）と解読されねばならない。

「脱構築」を標榜するジェンダー研究による典型的批判であるが、ここで注目したいのは、彼女の議論は、最終的には、書簡集あるいはこれが表現している二人の愛人の歴史的実在ではなく、このテクストの表象構造それ自体にあるという点である。この点でより明快なのは、1990年の二つの論文において、去勢と娼婦を主題として、二人の恋人の間に紡がれた思想と修辞を解きほぐすことを試みたヌヴェ[NOUVET　1990-1,2]であろう。彼女は、論文の冒頭においてすでに、ここで問題とするアベラールとエロイーズとは、テクストにおいてそのように名付けられている者たちのことであり、歴史的実在といっさい無関係である、と高らかに宣言するのである。同様の主張は、ジェンダー主義者ばかりでなく、文芸批評の影響のもとにある「テクスト主義者」たちのもとでも、まったく同じ構図にもとに現れる。自伝における個性を主題として、第１書簡を検討したヴィッツは[VITZ　1975＝1989]、アベラールの自己表象のあり方を分析するにあたって、つぎのように作業を正当化する。ここで検討するアベラールはテクストに表現されている「アベラール」であって、歴史上実在したアベラールとは関係がないため、真正性問題は留保したまま議論を行うことは可能であると。

注目に価するのは、この種の「テクスト主義」がさらに大きな広がりを見せ

ているように思えることである。たとえば、中世文学史研究の大家ズムトルは、1979年に刊行された往復書簡集の著名なフランス語訳の序論で［ZUMTHOR 1979］、往復書簡集の真正性をめぐる議論は結局不毛であるとして、実在の二人ではなく、テクストに凝集した主人公の姿のみに関心を集中しようと呼びかける。1995年にジェンダー研究の圧倒的な影響のもとで書かれたデュビーのエロイーズ論も、基本的には同じ構図のもとで書かれている［DUBY 1995］。激動の20世紀後半の歴史学研究の最良の同伴者の一人であったこの碩学は、近年の歴史学研究における史料論的考察の深まりという動向を背後に、「回心物語」説を前提とした上で、書簡集物語の構築的性格を強調する。問題なのは、彼の議論が「脱構築」へと向かえば向かうほど、テクストの真正性の議論は重要性を失うように見えることである。晩年特有の留保とニュアンスに満ちた文体によって、書簡集の偽作が明確に断言されることはないが、デュビーの議論構成自体は、いわば真正性の当否とはまったく無関係な次元に置かれているのは明らかであろう。

最後に、書簡集をめぐる研究の現状を、あらためて整理しておきたい。

まず第一に指摘せねばならないのは、従来議論されていたタイプの真正性問題は、ほぼ完全に消滅したという点であろう。文体・語彙研究については方法論上の未熟さが明らかとなったし、テクスト間に齟齬や矛盾を拾い出すこともはや問題とされない。西欧中世における真と偽のあり方自体の微妙さが意識されるにつれ、真正性を正面から議論することがますます困難となってきたと言えるであろう。

かわって研究の主たる対象として浮かび上がってきたのが、書簡集、あるいはトロワ写本が示していると考えられるパラクレ修道制資料の生成、および後世での取り扱いに関する研究である。現在までの研究段階では、書簡集は、歴史的に実在したと思われる真正な書簡を素材として、最終的にはパラクレ修道院において成立したものと思われる。編纂の目的については、「回心物語」説への疑問があらたにミューによって提出されるなど［MEWS 1995］、異論もないわ

けではないが、パラクレ修道院の創建の由来とその基本的な修道生活のあり方を提示するものとして、修道院に伝来したことは間違いない。13世紀にはいってはじめて、パラクレ修道院の外へ流布したと思われるが、すでに一定度アベラール/エロイーズ物語を生成・受容していたとも思われる、とりわけパリをはじめとするさまざまな場の状況については、今後の課題とせねばなるまい。

しかしながら、研究史上最大の問題は、マレンボンが研究の「イデオロギー闘争」と呼ぶ状況の到来であろう。マレンボンは、最近の二つの研究動向回顧論文において、あらためてこれまでの研究を総括して、以下のような指摘をおこなう[MARENBON 1997；2000]。彼によると、往復書簡集研究は、以下の二つのグループに分類される。一つは、証拠を探索して提示し、段階を踏んで議論を行うグループである。たとえば、シルヴェストルは、みずからの予断と趣味を隠さず、その結論もまったく受け入れがたいが、遂行した作業自体はまっとうである。ドゥロンクについても、その議論は、彼の中世文学における素養に負うところが大きく、また書簡集の真正性を確信した上での議論であるが、作業自体は有益であり、また中世文学の複雑な側面の理解に資するものである。これに対して、書簡集の真正性は証明不可能として無視し、ただテクストの解釈のみを提示する一群がある。いわゆる文芸批評アプローチだが、これを禁じる権利は誰にもないとしても、テクストの歴史的性格と関連させない議論は、ほとんど無意味であるという。彼にとってさらに危機と感じられるのは、一部の論者が、歴史的真正性についての議論を避ける傾向にあると感じられる点である。マレンボンによれば、言語や文体、典拠の研究に関しては、確実性の度合いに応じて判断を留保することはありえるが、書簡集の解釈に関わる研究については、この態度はまったく採用しがたく、確実さにもとづく議論を放棄することにつながるという。以上を前提とした上で、彼はジェンダー研究が提示するさまざまな観点の有効性を認めながらも、そのテクスト内に完結しがちな性格と、それにも関わらず、細部の解釈が単純に論者個々の心理分析にもとづく傾向がある点をするどく指摘する。以上のような状況を、彼が「イデオロギー闘争」と呼ぶのは、以下の認識による。すなわち、「テクスト主義」やジェンダー

研究の背後にある、いわゆる言語論的転回、あるいは構築主義的発想においては、過去の事実関係の復元の可能性自体が否定され、議論を特定集団の利害と関心に還元する傾向がみられることから、この挙証責任が放棄される場においては、対立する見解の間の議論がそもそも成立しないように見えるからである（神々の闘争）。

マレンボンの危惧を簡単に否定することは、残念ながら、難しいとも思われる。批判される一部の研究においては、ボチエやワッデルの成果のみならず、往復書簡集研究の常識に属する事柄も十分に咀嚼されているとは思えないからである。かつては、たとえ対立の構図をもつ議論が展開していても、意見を交わす共通の場が設定されていたが、現在これが解体しつつあるのである。

おわりに

本稿は、とりわけ史料論の観点から、アベラール/エロイーズ往復書簡集をめぐる諸研究を概観し、研究の現状を整理することを目的とするものであった。最後に、現代の実証主義歴史学が抱える諸問題との関連で、本稿の検討結果をあらためて整理したい。

第一に、現在歴史学において議論されている史料論上の論点を念頭において、往復書簡集研究を整理してみよう。まず史料類型論であり、とりわけ「回心物語」説の形成と受容とに関連する。西欧中世における書簡集とは、著者とされる人物の心情の吐露が期待されるような透明なテクストではない。また、教会、とりわけ修道院文学は、最終的な救いのためのこの世の超克、という枠組みを前提としており、なんらかの教化的性格に対応した固有の形式の外では存在しえない。「回心物語」説自体は、70年代後半以降、正面切った議論の対象とはなっていないが、これは、自明の前提とされるか、あるいは疑問を寄せつつも、これを正面から否定することがきわめて困難であるからであろう。つぎに挙げられるのは、テクストの受容過程への関心の移行である。通常「史料の一生」という比喩で提示されるこの動きは、往復書簡集問題においては、とりわけ13世紀以降のパラクレ修道院の歴史への関心として顕著に現れた。さらに、パラク

レ以外の場、とりわけパリにおける往復書簡集受容の問題は、重要な今後の課題として認識されている。最後に、往復書簡集あるいは写本の生成過程研究への、関心の移行が指摘されねばならない。従来の研究がもっぱら、往復書簡集の個々のテクスト、あるいはその前提となる素材の真正性を問題としていたのに対して、最近の諸研究においてはむしろ、素材を利用した編纂の意図とその背景に関心が寄せられている。重要なのは、この動きは、結果として、史料情報の歴史的真正性の吟味が脇に追いやられ、史料テクスト内部に関心が集中される傾向を同時にもたらしたように見える点である。

この問題は、第二の検討課題である、往復書簡集研究の動向それ自体の特徴と密接に関係する。すでに述べたように、70年代以降の書簡集研究は、情緒的心情論と体系的方法論の欠如によって特徴づけられていた60年代までの議論の否定として現れ、当初は、実証主義歴史学の前提と方法論（同時代文脈において現象を理解することをめざして、具体的な証拠を発掘・提示する）にもとづく研究が多く提出された。語彙・文体研究や事実関係の検証、同時代文脈への位置づけなどがそうであるが、とりあえず研究の「客観性」志向の段階と表現しておこう。ここでは、たとえ議論の焦点が、書簡集の生成過程や、後世における受容・伝来過程にあっても、素材の真正性問題は明確に意識されていたと思われる。ところが、ここ30年ほどの間に、書簡集の素材あるいは書簡集それ自体の真正性については、遂行する議論とは無関係として外部化する動きが現れた。いわゆる「テクスト主義者」の議論がそうであるが、より明快なのはジェンダー論者の主張であろう。彼らポスト・モダン主義者の議論構成と結論は、一定の解釈枠を前提とし、一般に歴史的文脈とは無関係にテクストを読み解くことからなっているが、興味深いのは、この性格だけをとりだせば、それは、かつての情緒的ロマン主義者の行っていたことと区別がつかないという点である。マレンボンがこの動向を強く批判するのは、一定の主義を背景とした（すでに結論は出ている）、しばしばテクストの心理的解釈に傾斜する議論構成（「客観的」証拠提出の欠如）は、議論の場の共有を阻害すると考えるからであった。以上からすれば、研究状況は、いったんは克服されたはずの、主観主義への揺

り戻しを経験しているかのように見えるが、ことはそれほど単純ではない。

まず第一に、別稿で強調したように[岡崎　2003]、現在の史料論研究は、構築主義と対立するどころか、むしろ共通の論点を多く含んでいる。たとえば、「回心物語」説は、西欧中世におけるジェンダー論にむしろ典型的な議論とも思え、その意味では、たとえばデュビーがこれに大きく傾斜するのも当然とも言えるのである。また、議論を「テクスト」の内部に限定し、歴史的現実性に深入りしない傾向は、狭義の西欧中世研究専門家の内部においても認められるが、史料論においても重要な論点となっている。すなわち、テクストあるいは言説は、現実なるもののなんらかの反映であるとはかぎらず、それだけで完結した世界を構成していることがありえるし、逆にこれが「現実」を変容させるかもしれない。重要なのは、そのようなテクストあるいは言説の存在の事実だけである(9)。

他方で、史料論は、ポスト・モダン派と対立するかたちで、かつての研究と一定度共通する性格を有している。この点では、なにより、かつての往復書簡集研究は、一応は西欧中世研究に一定の知識と教養を有した専門家によって議論されていた、という事実をまず想起せねばならない。たとえば、ジルソンの著書の評価に関して、諸家が問題とするのは、ジルソンのエピゴーネンたちの無責任なロマン主義なのであって(10)、彼の著者自体は依然として学問的に貴重な貢献を含んでおり、どのような立場の論者にとっても利用可能な議論が多く提示されている。他方、現在一部では、往復書簡集研究が、西欧中世研究という土壌から切り離されて行われているが、このことの当否は、往復書簡集研究を越えた問題として別個に考えねばならないであろう。

最後に、今後の方向として、重要と思われる論点を提示して、本稿を閉じたい。

まず第一に、実証主義的歴史学としては、なにより、同時代文脈をより正当に理解することを可能とさせる、基礎的歴史情報の発掘に努めねばならない。このためには、テクストの形式・内容の両面にわたる研究はもちろん、とりわ

け、かつて往復書簡集に関してほとんど提起されてこなかった種類の諸問題、すなわち、同時代の政治・経済・社会・宗教等についての研究とのリンクが必須であろう。この方面では、手付かずの問題が多く残っているはずである。

第二に、かつてフォン・ムースが手がけていた、往復書簡集研究史の「解釈学的」研究は[VON MOOS 1974]、それ自体として興味深いものとなるであろう。本稿も、結果はともかく趣旨としては、研究のあり方それ自体を、20世紀末の学問研究の歴史のなかに位置づけることを目標としていたが、研究史の思想史的、社会学的観点からの整理は、まったく手付かずの課題として残っている。このような関心は、「歴史編纂の歴史」研究の流行や、構築主義の「脱構築＝メタレヴェルの議論への嗜好」と触れ合う点が多いように思われ、逆にこの関心からすれば、12世紀の二人の恋人の間の往復書簡集に関する後世の関心と研究方法の推移は、格好の検討課題とうつるであろう。

第三に、一見対立しているかに見える議論にも、共有する発想や作業が多く含まれており、このことは、神々の闘争を避けるかたちで、共有された基盤の上に議論を前に進まさせる可能性が存在することを示している。今後の課題は、議論の性格とレヴェルの明確化と区別であり、それによって個々の作業と結論の限界と位置づけが明らかにされる。学問の目的は、唯一の真理への還元に執着することではなく、より多様な理解の可能性へと自らを開くことであろう。

当然のことであるが、往復書簡集の魅力に取り憑かれることは、必ずしもその理解を深めることにはつながらない。この点での本稿の主張は単純である。「より」深い、あるいは「より」妥当な理解について語りうるとするなら、それはいかにして可能なのかを考えることは、いつでも大切なのではないだろうか。

注

（1） 本稿での文献レフェランスは、基本的に稿末の参考文献目録の表示を、本文中に組み込んで行う。なお、この文献目録には、今後の広範な議論の深まりを期待して、本稿では直

接取り上げない文献についても、幅広く掲載している。

(2) *Petri Abaelardi, filosofi et theologi, abbatis Ruyensis, et Heloisae conjugis ejus, primae Paracletensis abbatissae, Opera, nunc primum edita ex MMS. Codd. V. illust. Francisci Amboesii, equitis, regis in sanctiore Consistorio Consiliarij, Baronis Chartrae, &c. Cum eiusdem praefatione apologetica, & censura doctorum Parisiensium,* Parisiis, 1616. この刊本は、九州大学付属図書館貴重書庫に一部所蔵がある。

(3) 史料類型論については、ジェニコ監修になる「西欧中世史料類型」シリーズを参照のこと。ジェニコ（森本芳樹監訳）『歴史学の伝統と革新』九州大学出版会、1984年参照。

(4) ジルソン以来ややセンチメンタルに議論されてきた、いわゆる「エロイーズの沈黙」についても、フォン・ムースによれば、これは単なる修辞学上のトポスにすぎない [VON MOOS 1975]。ルクレールによる、聖ベルナール書簡集についての近代的精神分析研究批判が、ここでもそのまま適用されるであろう [LECLERCQ 1973]

(5) アベラールおよび彼の周辺の著作活動についての網羅的調査と、写本等のリストアップは、[DAMIEN VAN DEN EYNDE 1962-1, 2, 3 ; 1963]、[LUSCOMBE 1969]等を経て、[BARROW/BURNETT-DAVID/LUSCOMBE 1984/5]に結実している。書簡集については、モンフランに先立って、マックルらが学問的に刊行し直していた [MUCKLE 1950 ; 1953 ; 1955 ; 1956] [McLAUGHLIN 1956]。アベラールの著作活動については、新刊本の序論[BUYTAERT 1969]のほか、クランチー[CLANCHY 1997]やミュー[MEWS 1995]、マレンボン[MARENBON 1997]等の最近の概説を参照こと。

(6) ベントン自身が、同定されていなかった教会会議議決部分を、1231年ルアン教会会議のものと確認した [BENTON 1974]。

(7) 1975年に刊行されたクリュニ研究集会の会議録 [1975] の各報告や、その直後に研究状況を回顧したジョリヴェ論文 [JOLIVET 1977] には、いずれもこの当惑が色濃く反映されている。

(8) その上で、彼女は、たとえば、若いときには魅力的であり、長じて有能・敬けんな修道院長となり、皆の称賛を集めたというエロイーズのキャラクターは、書簡集に現れる複雑な人間像とよく符合するのではないかという。ブルガンの議論は、一面実証主義的であるが、他方では、テクストと現実、さらにはテクストと人間像を一元的に短絡させることに警戒的という意味で、のちにふれる構築主義的議論の影響が感じられる。この点は、彼女が女性文献学者であるという事実に関連するに違いない。

(9) この種の問題が本格的に問われているものとして、ル・ゴフの『聖王ルイ』が挙げられる。LE GOFF, J., *Saint Louis*, Paris, 1996（邦訳『聖王ルイ』新評論、2001年。「訳者あとがき」も参照のこと）。ここでは、13世紀の聖人＝王を対象として、彼について書かれた同時代史料の史料類型研究から、個々の史料および「偉人」についての構築的性格を析出した上で、西欧中世において「個人に接近すること」はどのようなことなのか、ある

いはそもそも可能なのか、という問いを提出する。そして、13世紀西欧世界のほとんどあらゆる領域にわたる同時代文脈との関わりのなかで、史料と現実、類型と個別、言説と実存についての諸問題が、具体的なテクスト分析を通して、議論される。

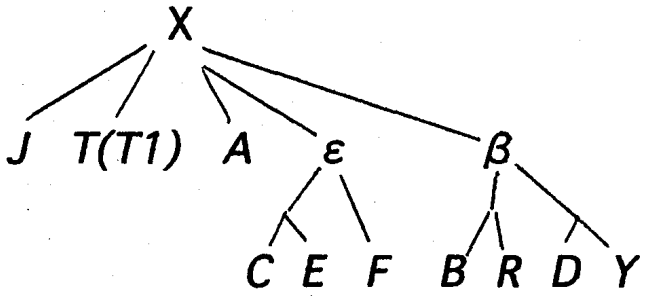
(10) たとえばミュー[Mews 1995]によれば、ジルソンの著書は、その趣旨に反して、むしろ書簡集の「ロマンティック・ラブ・イメージ」を増殖させたとする。思うに、ジルソン著書の正当な受容が困難となった理由としては、ジルソン自身の責任も想定すべきであろう。「エロイーズの沈黙」に関する延々と続く陳述に代表される情緒的議論が、実証主義的成果を結果的に背後に押しやることとなったのではないだろうか。また、conversio/conversatio 論は、それが写本や語彙などについての基礎的研究にまったく配慮されていないなどの理由から、現在ではほぼ無意味な権威主義的議論であったと考えられるが[MONFRIN 1975]、一般大衆には、ラテン語術語をあやつる議論は、いかにも「学問的」とうつったであろう。残念ながら、我が国には、この種の問題はとりわけ当てはまるといわねばならない。

付　記　本稿を二人の恩師に捧げる。ここに、本稿成立に関する私的な事情を書きとめることをお許しいただきたい。

本稿は、本来2001年8月初旬に開催された「西洋中世史料論研究会」の九重合宿のために準備されたものである。したがって、本稿はそもそも「史料論」として構想されたのであり、その成立事情から、研究会の主宰者である森本芳樹先生の存在と深く結びついていた。この折りの合宿は研究会の掉尾となり、先生ご自身も2004年3月をもって公式の職から退かれることとなった。いま一人の恩師森洋先生は、2003年5月7日永眠された。森先生こそ、西洋中世史研究を志しながらも、卒業論文のテーマを決めあぐねていた私を、アベラール研究へと導かれたご当人である。本来、実証研究をもって報いるべき学恩を思えば、今は内心忸怩たる思いは尽きないが、学問研究のすがたについて研究したものとして、本稿を受け入れていただけることを祈るのみである。

付録資料：書簡集の写本伝来および刊本（[MONFRIN 1959] による）

1：書簡集の全写本および1616年刊本の基礎データ



J. --- Paris, Bibl. nat., fr. 920；13世紀末のジャン・ド・マンによる翻訳；14世紀中葉の写本；書簡集＋エロイーズへの信仰告白（p.217）＋弁明(p.218)＋尊者ピエールのエロイーズ宛書簡（p.223-231）；対応するラテン語写本伝来せず

T. --- Troyes, Bibl. mun., ms. 802; 241 fols.；三つの起源が異なる部分の合冊。他の部分は、フレデガリウスの年代記（fol. 104-155）；偽ディオニシウス文献（fol. 156-241）；18世紀はじめにトロワのオラトリオ会修道院で製本；書簡集を含む部分：fol. 1-103；13世紀末から14世紀はじめの写本

A. --- Paris, Bibl. nat., lat. 2923; 177 fols., 2 col., 42 lignes; parchemin; 書簡集（fol. 1-42）；雑書簡他（fol. 43-S1）；13世紀末の写本、南仏起源？；1337年頃ペトラルカが所蔵；1426年パヴィアのミラノ公蔵書；ブロワの書籍商を経て、16世紀にはフランス王の蔵書；革命で国有財産

C. --- Paris, Bibl. nat., nouv. acq. lat. 1873；17世紀に異なる二つの部分を合冊？；ヘブライ＝ラテン語辞典(fol. 1-115)；雑書簡(fol. 116-217)：217 fols., 1 col., 32 lignes, papier；このうち fol. 136-207v が書簡集：15世紀の写本；起源不明；1903年国立図書館がフィリップスの売り立てで購入（ギルフォード卿旧蔵書）

E. --- Paris, Bibl. nat., lat. 2545; papier; 5 cahiers de 10 fols. ＋ un cahier de 8 fols.；書簡集（fol. 1-53v）；アベラール関係雑（fol. 54以下）；15世紀末から16世紀の写本

F. --- Paris, Bibl. nat., lat. 13057; 207 pages; papier；第二～第七書簡(pp. 10-119)；第一書簡（pp. 121-80）；アベラール関係雑（pp. 181以下）；16世紀末から17世紀の写本；サン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院起源（1677年の目録記載）

B. --- Paris, Bibl. nat., lat. 2544; 43 fols.; 2 col., 42 lignes；13世紀末から14世紀の写本；書簡集(fol. 3-41)；1331年頃、パリ大学医学部教師 Jacques de Gentis が所蔵；16世紀末 Paul Petau がエヴルーのプレジディアル裁判所評定官 Jacques Le Batelier d'Aviron より購入；その後 Colbert の手をへて、フランス王蔵書

R. --- Reims, Bibl. mun. ms. 872; 161 fols., 2 col., 37 lignes; parchemin；セネカ書簡集

(fol. 1-111)；書簡集（fol. 112-57)；13世紀末から14世紀の写本；15世紀にランス参事会蔵書

D. --- Douai, Bibl. mun., ms. 797；大部分はヴァンサン・ド・ボーヴェの『歴史鏡』；13世紀から14世紀はじめの写本；書簡集（fol. 321-8)；マルシエンヌ修道院起源？

Y. --- Oxford, Bibl. Bodléienne, Addit. C 271 (29565)；109 fols., 2 col., 40 lignes；教父関係（fol. 2-84)；書簡集（fol. 85-109)；14世紀後半の写本；15世紀末にカンブレ参事会員が同僚より購入；1885年オックスフォード大学がグレヴェル書店より購入；非常に美しい書体だが、多くの誤りを含む

a. --- 1616, デュシェーヌ A. Duchesne の刊本、ダンボワーズ F. d'Amboise の序文付き（後者が事業を始め、前者が完成）

ダンボワーズが見た写本：

A1：ブルターニュで発見、ナント写本；戒律を含んでいる；Cousin は、*E* 写本に d'Amboise の名前があったと証言（現在消失)；=>*E*?

A2：ティロン修道院長 Philippe Desportes 蔵書；これは元コレージュ・ド・フランス教授 Etienne Gourmelen (mort en 1593) の蔵書、彼は le Finistène 生まれ；=>ブルターニュ起源の写本で現在は遺失？

A3：パラクレ修道院所蔵、修道院長 Marie de la Rochefoucauld から借り受ける；刊本の底本；institutiones が付属していた；*T* 写本とテクスト類似

デュシェーヌが見た写本：

D1：Petau；=>*B*.

D2：Papire Masson, 遺失?

D3：Saint-Victor；16世紀の目録でもこの教会の所蔵が確認；1706年最後の言及；戒律を含んでいたらしい；=>*C* ou *E*?

2：かつて存在が確認され、現在失われた写本

—14世紀末、Jean de Montreuil が Coluccio Saluati にもたらしたという写本

—Bibl. mun. Dijon, ms. 525旧蔵で、17世紀中葉に盗難；その後一部が、国立図書館のもとへ (Bibl. nat., nouv. ac. fr. 20001)；1361年　Mathias de Ribau による転写

—1660年、E. Pasquier が *Recherches de la France* を執筆する際に利用した写本

—C. Fauchet (1744-1793) が内容を要約している写本

3：トロワ写本

T. Troyes, Bibl. mun., ms. 802, fol. 1-103；parchemin (ou vellum), 255x200；10 cahiers de 8 fols., 1 cahier de 10 fols., 1 cahier de 8 fols., 6 fol. Cousus; deux colonnes de 31 lignes

(205×70)；2人の書記？、ただし均質な筆跡

—内容構成

fol. 1-88v：書簡集（第1～第8書簡）

fol. 89-90v：Institutiones；

fol. 90v-93：Ivo, *Panormia*；

fol. 93：deux canons du concile（de Rouen, 1231）；

fol. 93-94：Statuts de Prémontré（1174-1238）；

fol. 94-102v：Regula sanctimonialium；＝816年アーヘン教会会議規定

fol. 102v：アベラールとエロイーズの墓碑銘、尊者ピエールによるアベラールの罪の赦し宣告（15/16世紀の追加）

—伝来過程

—1347年3月21日、パリ参事会員・パリ大学学長・ペトラルカの友人のイタリア人、Roberto de Bardi がパリ参事会より購入、1349年死去

—15/16世紀に、タイトルを赤く強調、墓碑銘他を追加

—1617年 François Pithou の遺言、トロワのオラトリオ会へ遺贈；1621年死去；1630年オラトリオ会へ

—18世紀には、トロワのオラトリオ会が確かに所蔵（言及、カタログ他）

—1790年？、トロワ市図書館へ

BIBLIOGRAPHIE

[1975] *Pierre Abélard, Pierre le Vénérable. Les courants philosophiques, littéraires et artistiques en Occident au milieu du XIIe siècle, Abbaye de Cluny, 2 au 9 juillet 1972*, Paris, 1975.

[1981] *Abélard en son temps. Actes du colloque international organisé à l'occasion du 9e centenaire de la naissance de Pierre Abélard (14-19 mai 1979)*, Paris, 1981.

[1988] *Fälschungen im Mittelalter. Internationaler Kongreß der Monumenta Germaniae Historica, München, 16.-19. September 1986. Teil V: Fingierte Briefe. Frömmigkeit und Fälschung. Realienfälschungen*, Hannover, 1988.

[BAGGE 1993] BAGGE, S., The autobiography of Abelard and medieval individualism, in *Journal of Medieval History*, 19, 1993, pp.327-350.

[BARROW/BURNETT-DAVID/LUSCOMBE 1984/5] BARROW, J., BURNETT-DAVID, C. and LUSCOMBE, D. E., A Checklist of the Manuscripts

containing the Writings of Peter Abelard and Heloise and Other Works closely associated with Abelard and his School, in *Revue d'histoire des textes*, 14/15, 1984/85, pp.183-302.

[BAUTIER 1981] BAUTIER, R.-H., Paris au temps d'Abélard, dans [1981], pp.21-77.

[BENTON 1974] BENTON, J. F., The Paraclete and the Council of Rouen of 1231, in *Bulletin of Medieval Canon Law*, n.s. 4, 1974, pp.33-38.

[BENTON 1975-1] BENTON, J. F., Fraud, Fiction and Borrowing in the Correspondence of Abelard and Heloise, in [1975], pp.469-511.

[BENTON 1975-2] BENTON, J. F., Philology's Search for Abelard in the *Metamorphosis Goliae*, in *Speculum*, 50, 1975, pp.199-217.

[BENTON/PROSPERETTI ERCOLI 1975] BENTON, J. F. and PROSPERETTI ERCOLI, F., The Style of the "Historia calamitatum": A preliminary Test of the Authenticity of the Correspondence attributed to Abelard and Heloise, in *Viator*, 6, 1975, pp.59-86.

[BENTON 1980] BENTON, J. F., A reconsideration of the authenticity of the correspondence of Abelard and Heloise, in [THOMAS 1980], pp.41-52.

[BENTON 1988] BENTON, J. F., The Correspondence of Abelard and Heloise, in [1988], pp.93-120.

[BOURGAIN 1981] BOURGAIN, P., Héloïse, in[1981], pp.211-37.

[BURNETT 1984] BURNETT, S. F., Notes on the Tradition of the Text of the «Hymnarius Paraclitensis» of Peter Abelard, in *Scriptorium*, 38, 1984, pp.295-302.

[BURNETT 1986] BURNETT, C. S. F., 'Confessio fidei ad Heloisam' - Abelard's Last Letter to Heloise? A Discussion and Critical Edition of the Latin and Medieval French Versions, in *Mittellateinisches Jahrbuch*, 21, 1986, pp.147-155.

[BUYTAERT 1969] BUYTAERT, E. M., General Introduction, in *Petri Abaeladi opera theologica*, Turnhout, 1969, pp.IX-XXXVIII.

[BUYTAERT 1974] BUYTAERT, E. M., ed., *Peter Abelard. Proceedings of the International Conference, Louvain, May 10-12, 1971*, Leuven/The Hague, 1974.

[CHARRIER 1933] CHARRIER, C., *Héloïse dans l'histoire et dans la légende*, Paris, 1933.

[CLANCHY 1997] CLANCHY, M. T., *Abelard. A Medieval Life*, Oxford/Cambridge. Mass., 1997; trad. par P.-E. Dauzat, *Abélard*, Paris, 2000.

[CONSTABLE 1976] CONSTABLE, G., *Letters and Letter-Collections*, Turnhout, 1976.

[CONSTABLE 1988] CONSTABLE, G., Forged letters in the Middle Ages, in [1988],

pp.11-37.

[DAMIEN VAN DEN EYNDE 1962-1] DAMIEN VAN DEN EYNDE, P., Le recueil des sermons de Pierre Abélard, dans *Antonianum*, 37, 1962, pp.17-54.

[DAMIEN VAN DEN EYNDE 1962-2] DAMIEN VAN DEN EYNDE, P., Chronologie des écrits d'Abélard à Héloïse, dans *Antonianum*, 37, 1962, pp.337-349.

[DAMIEN VAN DEN EYNDE 1962-3] DAMIEN VAN DEN EYNDE, P., Ecrits perdus d'Abélard, dans *Antonianum*, 37, 1962, pp.467-480.

[DAMIEN VAN DEN EYNDE 1963] DAMIEN VAN DEN EYNDE, P., Détails biographiques sur Pierre Abélard, dans *Antonianum*, 38, 1963, pp.217-23.

[DE GANDILLAC/McLEOD 1968] DE GANDILLAC, M. et McLEOD, E., Abélard et Héloïse, dans *Entretiens sur la renaissance du 12e siècle*, éd. par M. DE GANDILLAC et E. JEAUNEAU, Paris/La Haye, 1968, pp.347-72.

[DRONKE 1976] DRONKE, P., *Abelard and Heloise in Medieval Testimonies*, Glasgow, 1976; reprint in ID., *Intellectuals and Poets in Medieval Europe*, Roma, 1992, pp. 247-294.

[DRONKE 1980] DRONKE, P., Heloise's Problemata and Letters: some questions of form and content, in [THOMAS 1980], pp.53-73; reprint in ID., *Intellectuals and Poets in Medieval Europe*, Roma, 1992, pp.295-322.

[DRONKE 1984] DRONKE, P., Heloise, in ID., *Women Writers of the Middle Ages*, Cambridge, 1984, pp.107-43.

[DRONKE 1988] DRONKE, P., Heloise, Abelard, and some recente discussions, in *Proceedings of the British Academy*, 74, 1988, pp.247-83; reprint in ID., *Intellectuals and Poets in Medieval Europe*, Roma, 1992, pp.323-342.

[DUBY 1995] DUBY, G., *Dames du XIIe siècle, I. Héloïse, Aliénor, Iseut et quelques autres*, Paris, 1995 (邦訳『十二世紀の女性たち』白水社、2003年)

[ENGELS 1974] ENGELS, L., Abélard écrivain, in [BUYTAERT 1974], pp.12-37.

[FERGUSON 1983] FERGUSON, C., Autobiography as Therapy: Guibert de Nogent, Peter Abelard and the Making of Medieval Autobiography, in *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 13, 1983, pp.187-212.

[FRAIOLI 1988] FRAIOLI, D., The importance of satire in Jerome's *Adversus Jovinianum* as an argument against the authenticity of the *Historia Calamitatum*, in [1988], pp.167-200.

[FRANK 1970] FRANK, D. K., Abelard as imitator of Christ, in *Viator*, 1, 1970, pp. 107-13.

[GILSON 1937/64] GILSON, E., *Héloïse et Abélard*, Paris, 1e éd., 1937; 2e éd., 1948; 3e

éd., 1964（邦訳『アベラールとエロイーズ』みすず書房、1987年）

[HARING 1975] HARING, N. M., Abelard yesterday and today, in [1975], pp.341-403.

[JAEGER 1980] JAEGER, C. S., The prologue to the *Historia calamitatum* and the "Authenticity Question", in *Euphorion. Zeitschrift für Litteraturgeschichte*, 74, 1980, pp.1-15.

[JAEGER 1999] JAEGER, C. S., *Ennobling Love. In Search of a Lost Sensibility*, Philadelphia, 1999.

[JANSON 1985] JANSON, T., Schools of Cursus in the XIIth Century and the Letters of Heloise and Abelard, in *Retorica e poetica tra i secoli XII e XIV. Atti del secondi Convegno internazionale di studie dell'Associazione per il Medioevo e l'Umanesimo latini in onore e memoria di Ezio Francheschini, Trento e Rovereto 3-5 ottobre 1985*, ed. by C. LEONARDI and E. MENESTO, Firenze, 1988, pp. 171-200.

[JOLIVET 1977] JOLIVET, J., Abélard entre chien et loup, dans *Cahiers de Civilisation médiévale*, 20, 1977, pp.307-322.

[JOLIVET 1990] JOLIVET, J., Pierre Abélard et son école, in *Contemporary Philosophy: a new survey, vol. 6: Philosophy and Science in the Middle Ages*, ed. by G. FLOISTAD, Dordrecht/Boston/London, 1990, pp.97-104.

[JOLIVET/HABRIAS 2003] JOLIVET, J. et HABRIAS, H., éd., *Pierre Abélard. Colloque international de Nantes*, Rennes, 2003.

[KINDERMANN 1976] KINDERMANN, U., Abaelards Liebesbriefe, in *Euphorion*, 70, 1976, pp.287-95.

[KONSGEN 1974] KONSGEN, E. ed., *Epistolae duorum amantium: Briefe Abaelards und Heloises?*, Leiden, 1974.

[LAURIE 1986] LAURIE, H. C. R., The «Letters» of Abelard and Heloise: a Source for Chrétien de Troyes?, in *Studii Medievali*, 3a ser., 27, 1986, pp.123-46.

[LECLERCQ 1973] LECLERCQ, J., Modern Psychology and the Interpretation of Medieval Texts, in *Speculum*, 48, 1973, pp.476-490.

[LUSCOMBE 1969] LUSCOMBE, D. E., *The School of Peter Abelard. The Influence of Abelard's thought in the Early Scholastic Period*, Cambridge, 1969.

[LUSCOMBE 1975] LUSCOMBE, D. E., Pierre Abélard et le monachisme, in [1975], pp.271-78.

[LUSCOMBE 1980] LUSCOMBE, D. E., The Letters of Heloise and Abelard since "Cluny 1972", in [THOMAS 1980], pp.19-39.

[LUSCOMBE 1988-1] LUSCOMBE, D. E., From Paris to the Paraclete: the Correspon-

dence of Abelard and Heloise, in *Proceedings of the British Academy*, 74, 1988, pp. 247-283.

[LUSCOMBE 1988-2] LUSCOMBE, D. E., Peter Abelard, in *A History of Twelfth -Century Western Philosophy*, ed. by P. DRONKE, Cambridge, 1988, pp.279-307.

[LUSCOMBE 2003] LUSCOMBE, D., Pierre Abélard et l'abbaye du Paraclet, dans [JOLIVET/HABRIAS 2003], pp.215-229.

[MARENBON 1997] MARENBON, J., *The Philosophy of Peter Abelard*, Cambridge, 1997.

[MARENBON 2000] MARENBON, J., Authenticity revisited, in [WHEELER 2000], pp.19-33.

[McLAUGHLIN 1967] McLAUGHLIN, M. M., Abelard as autobiographer: the motives and meaning of his "Story of Calamities", in *Speculum*, 42, 1967, pp.463-88.

[McLAUGHLIN 1975] McLAUGHLIN, M. M., Peter Abelard and the dignity of women. Twelfth-century 'feminism' in theory and practice, in [1975], pp.287-335.

[McLAUGHLIN 1956] McLAUGHLIN, T. P., Abelard's Rule for Religious Women, in *Mediaeval Studies*, 18, 1956, pp.241-92.

[McLEOD 1938] McLEOD, E., *Heloise. A Biography*, London, 1938; 2nd ed., 1971.

[McLEOD 1993] McLEOD, G., "Wholly Guilty, Wholly Innocent": Self-Definition in Héloïse's Letters to Abélard, in *Dear Sister. Medieval Women and the Epistolary Genre*, ed. by K. CHEREWATUK and U. WIETHAUS, Philadelphia, 1993, pp. 64-86.

[MEWS 1979] MEWS, C. J., The International Conference held in Trier (17-19 April 1979) on the Nine Hundredth Anniversary of Abelard's Birth, in *Rivista critica di storia della filosofia*, 34, 1979, pp.495-506.

[MEWS 1985-1] MEWS, C. J., La bibliothèque du Paraclet du XIIIe siècle à la Révolution, dans *Studia monastica*, 27, 1985, pp.31-67.

[MEWS 1985-2] MEWS, C. J., On dating the Works of Peter Abelard, in *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Age*, 52, 1985, pp.73-134.

[MEWS 1988] MEWS, C. J., In search of a name and its significance: a twelfth-century anecdote about Thierry and Peter Abelard, in *Traditio*, 40, 1988, pp.171-200.

[MEWS/JOLIVET 1990] MEWS, C. and JOLIVET, J., Peter Abelard and his influence, in *Contemporary philosophy: a new servey, vol. 6: Philosophy and Science in the Middle Ages*, Dordrecht/Boston/London, 1990, pp.105-140.

[MEWS 1995] MEWS, C. J., Peter Abelard, in *Authors of the Middle Ages. Historical and Religious Writers of the Latin West*, vol. II, no 5, Aldershot, 1995, pp.1-88.

[MEWS 1999] MEWS, C. J., *The Lost Love letters of Heloise and Abelard: Perceptions of Dialogue in Twelfth-Century France*, New York, 1999.

[MIETHKE 1973] MIETHKE, J., Abelards Stellung zur Kirchenreform. Eine biographische Studie, in *Francia*, 1, 1973, pp.158-92.

[MONFRIN 1959] ABELARD, *Historia Calamitatum*, éd. par J. Monfrin, Paris, 1959; 4e. éd., 1978.

[MONFRIN 1975] MONFRIN, J., Le problème de l'authenticité de la correspondance d'Abélard et d'Héloïse, dans [1975], pp.409-24.

[MUCKLE 1950] MUCKLE, J. T., C.S.B., Abelard's Letter of Consolation to a Friend (*Historia Calamitatum*), in *Mediaeval Studies*, 12, 1950, pp.163-213.

[MUCKLE 1953] MUCKLE, J. T., C.S.B., The Personal Letters Between Abelard and Heloise, in *Mediaeval Studies*, 15, 1953, pp.47-94.

[MUCKLE 1955] MUCKLE, J. T., C.S.B., The Letter of Heloise on Religious Life and Abelard's First Reply, in *Mediaeval Studies*, 17, 1955, pp.240-81.

[NEWMAN 1992] NEWMAN, B., Authority, authenticity, and the repression of Heloise, in *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 22, 1992, pp.121-57.

[NOUVET 1990-1] NOUVET, C., La castration d'Abélard: impasse et substitution, dans *Poétique*, 83, 1990, pp.259-280.

[NOUVET 1990-2] NOUVET, C., The Discourse of the "Whore": An Economy of Sacrifice, in *Modern Language Notes*, 105, 1990, pp.750-773.

[PAYEN 1975] PAYEN, J. C., La pensée d'Abélard et les textes romans du XIIe siècle, in [1975], pp.513-21.

[ROBERTSON 1972] ROBERTSON, D. W., *Abelard and Heloise*, London, 1st ed., 1972; 2nd ed., 1974.

[SCHMEIDLER 1914] SCHMEIDLER, B., Der Briefwechsel zwischen Abälard und Heloise eine Fälschung?, in *Archiv für Kulturgeschichte*, 11, 1914, pp.1-30.

[SCHMEIDLER 1935] SCHMEIDLER, B., Der Briefwechsel Abälard und Heloise als eine literarische Fiktion Abälards, in *Zeitschrift der Kirchengeschichte*, 54, 1935, pp. 325-338.

[SCHMEIDLER 1940] SCHMEIDLER, B., Der Briefwechsel zwischen Abaelard und Heloise dennoch eine literarische Fiction Abaelards, in *Revue bénédictine*, 52, 1940, pp.85-95.

[SILVESTRE 1977] SILVESTRE, H., Réflexions sur la thèse de J.F. Benson relative au dossier «Abélard-Héloïse», dans *Recherches de théologie ancienne et médiévale*, 44, 1977, pp.211-216.

[SILVESTRE 1981] SILVESTRE, H., Pourquoi Roscelin n'est-il pas mentionné dans l' «*Historia calamitatum*»?, dans *Recherches de théologie ancienne et médievale*, 48, 1981, pp.218-224.

[SILVESTRE 1985] SILVESTRE, H., L'idylle d'Abélard et Héloïse: la part du roman, dans *Bulletin de la Classe des lettres et des sciences politiques de l'Académie royale de Belgique*, 5e section, 71, 1985, pp.157-200.

[SILVESTRE 1988] SILVESTRE, H., Die Liebesgeschichte zwischen Abaelard und Heloise: der Anteil des Romans, in [1988], pp.121-165.

[SMITS 1983] SMITS, E. R., *Peter Abelard. Letters IX-XIV. An edition with an introduction*, Groningen, 1983.

[SOUTHERN 1970] SOUTHERN, R. W., The Letters of Abelard and Heloise, in ID., *Medieval Humanism and Other Studies*, Oxford, 1970, pp.86-104.

[THOMAS 1980] THOMAS, R., ed., *Petrus Abaelardus (1079-1142). Person, Werk und Wirkung*, Trier, 1980.

[VERGER 1981] VERGER, J., Abélard et les milieux sociaux de son temps, in [1981], pp.107-31.

[VERGER 1982] VERGER, J. et J. JOLIVET, *Bernard-Abélard ou le cloître et l'école*, Paris, 1982.

[VERGER 1996] VERGER, J., *L'amour castrée. L'histoire d'Héloïse et Abélard*, Paris, 1996.

[VERNET 1975] VERNET, J., La tradition manuscrite et la diffusion des ouvrages d'Abélard (résumé), in [1975], pp.405-7.

[VITZ 1975] VITZ, E. B., Type et individu dans l' "autobiographie" médiévale. Etude d'*Historia Calamitatum*, dans *Poétique*, 24, 1975, pp.426-445.

[VITZ 1989] VITZ, E. B., Abelard's *Historia calamitatum* and Medieval Autobiography, in ID., *Medieval Narrative and Modern Narratology*, New York, 1989, pp.11-37.

[VON MOOS 1973] VON MOOS, P., *Palatini quaestio quasi peregrini*. Ein gestriger Streitpunkt aus der Abaelard-Heloise-Kontroverse nochmals überprüft, in *Mittellateinisches Jahrbuch*, 9, 1973, pp.124-58.

[VON MOOS 1974] VON MOOS, P., *Mittelalterforschung und Ideologiekritik. Der Gelehrtenstreit um Heloise*, München, 1974.

[VON MOOS 1975] VON MOOS, P., Le silence d'Héloïse et les idéologies modernes, in [1975], pp.425-68.

[VON MOOS 1976] VON MOOS, P., Die Bekehrung Héloïses, in *Mittellateinisches Jahrbuch*, 11, 1976, pp.95-125.

[VON MOOS 1980] VON MOOS, P., Post festum. Was kommt nach der Authentizitätsdebatte über die Briefe Abaelards und Heloises?, in [THOMAS 1980], pp.75-100.

[WADDELL 1985/3] WADDELL, C., ed., *The Old French Paraclete Ordinary and the Paraclete Breviary. t. I, Introduction and commentary; t. II, Edition, t. IIIA, Edition, Kalendar and Temporal Cycle; t. IIIB, Edition. The Sanctoral Cycle; t. IIIC, Edition, Common of Saints, Varia, Indices*, Gethsemani Abbey, Trappist, Kentucky, t. I, III, 1985, t. II, 1983, 5 vol.

[WADDELL 1987] WADDELL, C., ed., *The Paraclete Statutes. Institutiones Nostrae. Introduction, Edition, Commentary*, Gethsemani Abbey, Trappist, Kentucky, 1987.

[WADDELL 1989] WADDELL, C., ed., *Hymn Collections from the Paraclete, t. I, Introduction and commentay; t. II, Edition of Texts*, Gethsemani Abbey, Trappist, Kentucky, 1989. 2 vol.

[WALDMAN 1985] WALDMAN, T. G., Abbot Suger and the Nuns of Argenteuil, in *Traditio*, 41, 1985, pp.239-272.

[WHEELER 2000] WHEELER, B., ed., *Listening to Heloise. The Voice of a Twelfth -Century Woman*, New York, 2000.

[WILSON/McLEOD 2000] WILSON, K. and McLEOD, G., Textual Strategies in the Abelard/Heloise Correspondence, in [WHEELER 2000], pp.121-142.

[ZERBI 1977] ZERBI, P., Un recente dibattito sull'autenticità della "Historia Calamitatum" e della corrispondenza fra Abelardo ed Eloisa, in *Studi di letteratura e di studi in memoria di Antonio di PIETRO*, Milano, 1977, pp.3-43.

[ZERBI 1981] ZERBI, P., Abelardo ed Eloisa: Il problema di un amore e di una corrispondenza, in *Love and Marriage in the Twelfth Century*, ed. by W. VAN HOECKE and A. WELKENHUYSEN, Louvain, 1981, pp.130-61.

[岡崎敦 1996] 岡崎敦「パリ司教座教会参事会における共同生活（9-12世紀）」『西洋史学論集』34、1996、1-27頁

[岡崎敦 2001] 岡崎敦「パリ司教座教会参事会の印章（12世紀）」『西洋史学論集』39、2001、1-21頁

[岡崎敦 2003] 岡崎敦「西欧中世史料論と現代歴史学」『九州歴史科学』31、2003、1-20頁